六篠会報

第10号
発行
神戸市灘区六甲台町一
神戸大学農学部内
六篠会（りくそうかい）
（神戸大学農学部同窓会）
印刷　明光印刷株式会社

会報第十号の発行に当って

六篠会々長　西川欣一

六篠会員の皆様、如何お過しですか。それぞれの職場で大いに御活躍のことと存じます。「六篠会報」も今回第十号という区切りの号となり、母校農学部も創立以来、四十五年が経過しました。開学当時は食料増産のみが叫ばれていたわけですが、今日では農学の分野も大きく変貌し、従来の狭い範囲の農業のみでなく、生物生産をはじめ地球環境の保全のため、先端的なバイオテクノロジーや情報工学等を導入して、研究領域が大きく広がっております。

さて、会報第九号（平成四年九月十一日発行）より二年を経過しておりますので、ここで二年間の神戸大学および農学部の組織改革をご報告すると共に、六篠会からのお願いを申し上げます。

神戸大学改革

先ず教養部の廃止があげられます。教養部で学ばれた神大農学部一回から二十五回の卒業生の皆様はさぞ驚かれるでしょうが、従来の一、二年生に一般教育、語学、保健体育を集中して教育していた教養部という組織が平成六年三月で完全に廃止され、教養原論、外国語、健康スポーツ科学として、専門教科と共に各学部で四年間の一貫教育となり、従来教養部に所属していた先生方は専門に応じて関係する学部に配置換えとなりました。

次ぎに、国際文化学部の新設と、教育学部の発達科学部への全面改組の実施です。国際文化学部は文化成立の原理的規範、コミュニケーションの基本構造、さらに言語、情報、異文化理解等に関する教育研究の場として平成四年十月に新設されました。

幼稚園から中学校までの先生を養成することを主目的とした教育学部を全面改組して、赤ちゃんから老人までの人間の生涯にわたる発達と学習を総合的に教育研究する発達科学部が平成四年十月に設置されました。

農学部の改組

社会経済構造の変動と科学技術の急速な進歩によって農業をとりまく社会環境は急激な変貌をとげ、農学関係の産業分野も拡大、多様化しております。このような状況下で、生物生産、バイオテクノロジー、ライフサイエンス等の新しい学問分野に寄与する人材を養成するため、従来の旧五学科を改組再編し、次のような新しい五学科十二大講座を平成五年四月から実施しています。

一、応用動物学科

旧畜産学科の改組で、動物資源を高度に利用するため、「応用動物遺伝学」、「動物機能調節学」の二大講座に改組、旧畜産製造学が生物機能化学科へ移行。

二、植物資源学科

旧園芸農学科の作物系が「資源植物学」に、園芸系が「園芸資源学」、経済系が「食料環境経済学」の三大講座に改組、旧熱帯有用植物学が生物環境制御学科へ移行。

三、生物環境制御学科

生物と環境との関係を総合的に理解するために、旧植物防疫学科と、旧農芸化学科から土壌学と植物栄養学、さらに旧園芸農学科から熱帯有用植物学が参加し、「生物環境学」、「植物機能制御学」、「生物制御学」の三大講座に改組。

四、生物機能化学科

旧農芸化学科の土壌学と植物栄養学が他学科へ移行し、旧畜産学科から畜産製造学が加わり「生物機能分子化学」、「生物機能利用化学」の二大講座に改組。

五、生産環境情報学科

旧農業工学科の土木系が「生産環境学」、機械系が「生物生産工学」に改組。

母校神大農学部の改組に当り、若干の移動はありましたが、旧五学科のスタッフが殆んど新五学科に移行した形ですので、六篠会員の皆様にはそれぞれの出身研究室（旧講座は新大講座の中の研究分野となっている。）を訪問され恩師や後輩と親交をもたれて、母校の発展をご確認下さい。そしてこの際、新講座又は分野単位の同窓会開催をおすすめします。

大学院農学研究科の移行

農学部に農学研究科修士課程が設置されたのは昭和四十七年四月で、学部の学科名と同じ名称の専攻が計五専攻、学部の上に設置されていた。

一方、博士課程の大学院自然科学研究科が理学部、工学部の教官と一緒に、後期三年のみの独立大学院として、昭和五十六年四月に開設され、農学部大学院担当教官は、農学部修士課程と自然科学研究科博士課程の両者を兼務する形であった。それが平成六年四月に修士課程の農学研究科が自然科学研究科の前期課程に統合移行し、自然科学研究科は前期課程二年、後期課程三年の五年制の大学院に改組した。このことは神戸大学が名実共に大学院大学となったことを意味します。

KUCに入会を

話は変わりますが、JR三宮駅前、神戸新聞会館八階にあるKUC（神大クラブ）もオープン以来、母校神戸大学全学部の卒業生が入会し、毎日多くの同窓生が顔を合わせ、素晴らしい百万弗の夜景を楽しみ乍ら歓談をしておりますが、案外安上りでアルコールや食事を取ることが出来ます。しかしこのことが一般には知られていないので、KUCの経営基盤確立のためにも、また仕事上の情報源の役にも立つと思いますので、六篠会員各位のご入会をお願いする次第です。KUCに行かれれば即刻その場で入会出来ます。六篠会のKUC運営委員は、会員拡大担当の石賀暢一氏（神大一C白鶴酒造勤務）、新家龍教授（農大五C）と小生です。ご連絡下さい。会費は月五百円で一年分六千円です。

おわりに、皆様の御健勝と御活躍をお祈りいたします。

（神戸大学名誉教授）

上：自然科学研究科棟（左）と遺伝子実験施設（右）
下：（左）農学部中庭　（右）滝川記念学術交流会館

ご挨拶と学部の近況報告

農学部長　岩崎照雄

（1）

記録破りの猛暑や水不足など、今年の夏もまた異常気象に悩まされましたが、漸く残暑も去り、六甲山も日々秋色が深くなってきました。六篠会会員の皆様には、その後もご健勝にてお過ごしのことと拝察申し上げます。本年3月、学部改組に尽力された尾崎前学部長がご退官になり、4月から私が後任を仰せつかっております。大学は今、改革の渦中にあり、大変荷が重いのですが、精一杯努めて責務を果たす所存でございます。どうぞ、ご指導とご鞭撻の程、よろしくお願い申し上げます。

この夏、ここ六甲台の農学部では、冷房設備のない大半の研究室がサウナ風呂のような状態にありました。教職員・学生一同、この悪条件下においてもなんとか頑張って参りました。しかし、このままでは夏期における教育研究活動に支障をきたしますので、1日も早い対策が望まれます。冷房装置の設置については、毎年要望しておりますが、諸般の事情でなかなか実現しません。それでもこの程、まず、パンク寸前になっていた農学部の受電装置を取り替えて、受電量を倍増する工事だけは完了しました。猛暑のおかげで（?）、教育研究環境の改善が一歩だけ前進したというところでしょうか。今後とも改善に向けて努力していくつもりです。

（2）

さて、すでにご承知のことと思いますが、神戸大学では教養部を廃止して4年一貫教育を実施することになり、これに連携して農学部も学科改組を行い、平成5年4月から新体制がスタートしております。したがって、平成6年10月現在、農学部在籍の学生は、3、4年次生は旧学科に、1、2年次生は新学科（応用動物、植物資源、生物環境制御、生物機能化学及び生産環境情報の5学科）に所属しており、ただ今、農学部における教育研究はまさに改革の途上にあります。

最近、中学生や高校生達の理工離れが社会問題として論議されておりますが、一方で、女性の社会進出を反映してか、女子の4年制大学への進学率が急上昇しつつあります。農学部においても年々女子学生の数が増加して、平成6年度入学生では学部学生定員の49%を占めております。今後まだ増えるのか、あるいはこの辺の比率が恒常化するのかはわかりません。いずれにしても、4年制大学における女子学生数の増加は他学部でもみられる全般的な傾向ですので、企業の雇用平等法の実質化が望まれるとともに、女子学生自身の意識改革も必要であると考えられます。

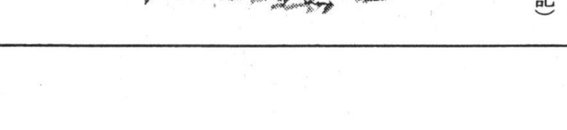
（3）

今回の学部改革の第1のポイントは、「従来の研究偏重型から教育重視型の大学へ」ということにあります。学部教育では、最近の科学技術の加速的進歩と多様化する社会的要請に柔軟に対応できる人材の養成を目標とし、そのためには基礎学力と総合的能力の涵養を重視し、学生を狭い専門領域に閉じ込めるべきではないと考えております。第2のポイントは、「教育研究の国際化」にあります。今日、食料資源の確保や環境保全の問題は、経済大国といえども一国で処理できる問題ではなくなっております。現在、わが国の農業は大きな曲がり角に直面しておりますが、同じことは世界の農業、特に急速な経済発展の途上にある東アジアや東南アジア諸国の農業についてもいえます。食料・環境問題がいよいよ緊急課題となっていることを深く認識し、グローバルな視点から真剣に対策を講じなければなりません。この意味において、農学部の教育研究においても、国際的視点に立つことが大変重要であると考えております。第3のポイントは、「地域との連携」です。現代の科学技術の進歩におけるテンポの速さは、同時に知識技術の陳腐化を加速しております。そこで、技術者の再教育や一般市民の生涯学習への対応が大学に要請されており、農学部でもできるだけこれらの要請に応えるために努力しつつあります。

（4）

学部改革の話だけで、与えられた紙面が尽きてしまいました。最後になりましたが、去る8月19日には、農学部退官教官との懇談会が2年ぶりに開催され、清水俊秀先生をはじめ25名の先生方のなつかしいお姿に接することができました。どなたも、いささか改革疲れの私達現役教官をしのぐお元気さだったことをご報告しておきます。六篠会会員の皆様の農学部に対する日頃の暖かいご支援に深く感謝申し上げるとともに、今後のご発展とご健勝を心から祈念申し上げます。

（平成6年10月21日記）



北西側から見た農学部学舎と新しくなった西門

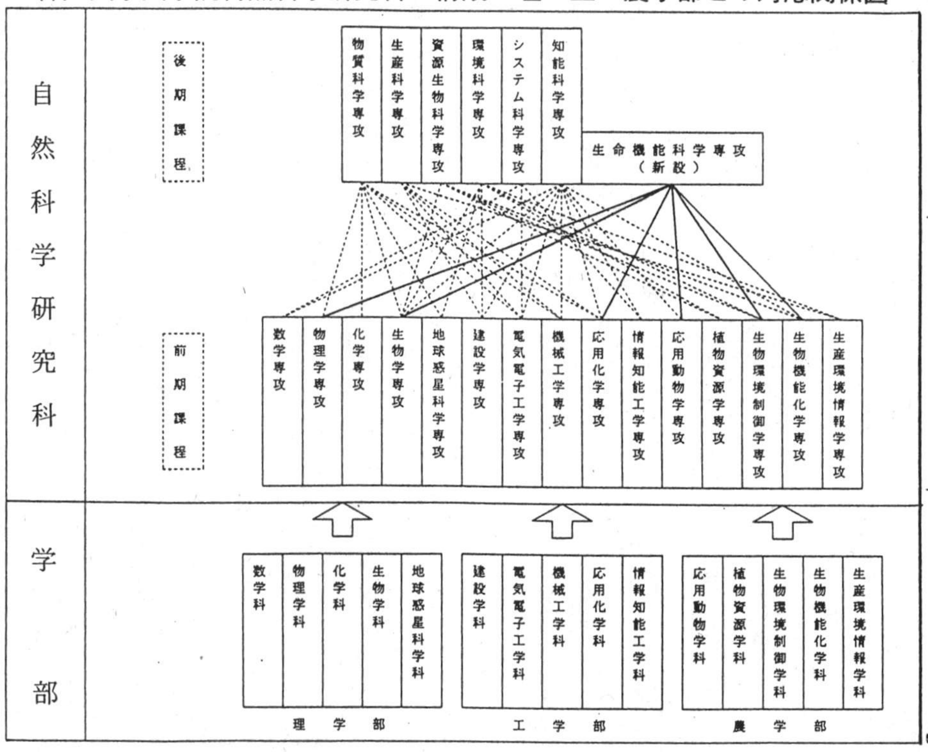
神戸大学自然科学系大学院の改革について
—自然科学研究科の拡充・改組—

自然科学研究科長　藤井　聰

これまで、神戸大学の自然科学系（医学系を除く）の大学院は理学、工学、農学の各学部に修士課程の研究科、さらにこの3学部を基礎とする博士課程（3年）のみの独立大学院自然科学研究科が設置されていた。修士課程では、それぞれの学部の専門分野をさらに深める目的で教育・研究が行なわれ実績をあげてきた。一方、昭和56年に設置された自然科学研究科は上の3学部を母体とするが、学部の組織とは別に、新たに編成された学際型の6専攻（物質科学、生産科学、資源生物科学、環境科学、システム科学、＊知能科学）からなり、境界領域の学問研究の進展や基礎かつ先端的研究の深化を図るとともに、学生が自分の専門に自閉的になることを避け、スクーリングを重視し、他分野の学問を積極的に習得できるようなカリキュラムが組まれている。これは、最近の急激な社会の変動や文化の進展に起因するさまざまな問題に科学・技術の面から対処することのできる人材の養成を図るためである。したがって授与する学位も「学術博士」（Ph.D）が主である。自己点検の結果、この設立理念は博士課程のみでなく修士課程にも及ぼすべきだと考えられた。そして、今年度より、理・工・農3修士研究科を15専攻に再編成して博士前期課程として自然科学研究科に統合し、従来の博士課程に生命機能科学専攻を増設して後期博士課程とし、前（15専攻、学年入学定員449名）・後期（7専攻、同69名）区分性の博士課程大学院に整備拡充された。前期（修士）課程は学部の専門領域の教育研究を深化させるとともに、総合性、学際性を重視した教育研究が行われ、学部と博士課程とのブリッジの役割を果たすようになっている。その他、研究科専任教官の整備、外国人留学生の定員化が行われた。なお、既存の理・工・農3研究科は平成7年3月廃止される。

＊知能科学専攻は平成元年度に設置。

神戸大学大学院自然科学研究科の構成と理・工・農学部との対応関係図



六篠会代議員制への移行について

六篠会幹事長　新家　龍

六篠会報第9号（平成4年9月発行）において「代議員制の導入について」説明させていたゞきました。最初の予定では既に移行されていた筈でありましたが、諸般の事情で今日に至っております。その間、六篠会では西川、東、山口、切貫各先生が農学部を退官されたり、各職場で60才停年を迎えられた六篠会員が多いことに驚いております。しかし、停年退職後も益々お元気に第二の職場で活躍されていることも耳にしており喜んでおります。

さて、現在の予定では平成7年度中には各卒業年次の代議員の選出を終了し、六篠会総会を開催して正式に代議員制へ移行ができればと思っております。代議員の選出については会員の皆様に格別のご協力をお願い申し上げます。

ここに、再度代議員制導入に伴う六篠会々則変更の主な項目を提示させていたゞき、六篠会総会にむけてのご検討をお願い致します。もし、お気付きの点がございましたらご連絡いたゞければ幸甚です。

「代議員制導入に伴う六篠会々則の主な変更点（案）」

1. 総則（変更なし）
2. 組織（〃）
3. 役員

第5条（役員）　本会に次の役員をおく。
会長1名、副会長若干名、常任幹事若干名、幹事若干名、監事2名

第6条（選出）
①会長は正会員のなかから代議員会において決定する。
②副会長および監事は役員の互選による。
③常任幹事および幹事は役員のなかから会長が委嘱する。

第7条（任務）（変更なし）
第8条（任期）（変更なし）

4. 代議員および代議員会

第9条（選出）
代議員は、正会員より各卒業年度毎に原則として1名、各支部から1名を選出し、幹事会の承認を得て会長が委嘱する。

④寄付金その他収入に関する事項
⑤名誉会員の推薦、特別会員及び賛助会員の承認
⑥会則の変更

又、総会を開くいとまがない場合は、代議員会を持って代えることができるものとする。ただし、その場合は次の総会において承認を得なければならない。

第12条（表決）
代議員会は、会長が招集し、代議員の過半数（委任状を含む）の出席により成立し、議事は出席代議員の過半数で決定する。可否同数の時は議長が決定する。

5. 総会

第13条（招集）
総会は、幹事会又は代議員会が必要と認めたとき会長が招集する。

第14条（議長）（変更なし）
第15条（表決）（変更なし）
第16条（表決事項）
次の事項は総会の議決を要する。
①会則の変更
②その他幹事会、代議員会が総会の議決を必要と認めた事項

6. 会計

第17条（経費）（変更なし）
第18条（会費）
会員は代議員会の定める会費を納入するものとする。
第19条（監査）（変更なし）

7. 付則

①本会の本部事務所は当分の間神戸大学農学部内におく。
②本会則施行についての細則は必要に応じて代議員会によりこれを決める。
③本会則は平成5年〇月〇日より施行する。

以上、変更の主な項目をとりあげましたが、従来の役員会が代議員会になり、より多くの正会員が六篠会の運営に参加されるように変更されるわけです。わが六篠会の益々の発展を心から祈念するものです。

神戸大学の近況—改組を中心として—

評議員　新家　龍

「神戸大学は、いま、躍動の季節を迎えています」という鈴木学長の書き出しで始まる「躍動する神戸大学」が昨年発行された。いわゆる神戸大学自己評価委員会が「点検・評価1993」として編集したものである。神戸大学は、確かに、国立大学の中ではこのところ改革につぐ改革のラッシュといわれている。

平成4年10月には、教養部が解消されて国際文化学部、教育学部が改組されて発達科学部、法学部と経済学部などが協力して国際協力研究科、そして大学教育研究センターがそれぞれ新設された。とくに、戦後教育改革制度の特徴とされてきた教養部が解消されたのは、一般教育と専門教育を有機的に連動させ、両者の一貫教育を図るためである。

平成5年度は、経営学部、理学部及び農学部が大講座制になり、長年にわたる経営学部の夜間教育が昼夜開講制に改められた。又、留学生の世話をする専任教官の組織である留学生センターも発足した。平成6年度には、理・工・農3学部からなる共通の修士課程を含む自然科学研究科博士課程（前期2年、後期3年）が発足した。又、3年制の医療技術短期大学部を4年制にして医学部の保健学科となった。さらに、経済学部の大講座制、同学部及び法学部の夜間教育が昼夜開講制へとそれぞれ改組された。

このように、神戸大学の各部局においてはそれぞれ改革と改組が進み、農学部では既述の如く平成5年度から大講座制となり、新しい学科名及び研究分野名（旧講座名との対応は付表参照）が用いられている。この新しい制度の入学生は現在2回生であり、旧制度の在学生（平成7年度卒業予定）が卒業するまで両制度のもとに学部が運営されることになる。

六篠会の皆様には、自分の卒業された学科名や講座名と、付表の新しい学科名、大講座名及び研究分野名との関係が直ぐに理解できないかも知れない。むろん、直ぐ分かる会員も多いとは思うが、研究分野の各教官名を同時に示した方がよかったかも知れないと思っている。いずれにしても、今回の改組は、現代社会の要請に応えうる人材の養成と科学技術への一層の貢献を積極的に行うことを目的として実施されたものである。農学部の益々の発展のために六篠会々員の皆様の一層のご支援とご協力を心からお願いします。

神戸大学農学部の新しい主要授業科目

学科名	大講座名	教育研究分野	主要授業科目
応用動物学科	応用動物遺伝学	遺伝生化学	動物生化遺伝学　動物分子遺伝学
		生殖生物学	生殖生物学　比較生殖生物学
		発生工学	発生工学　応用繁殖学
		統計遺伝学	動物応用遺伝学　統計遺伝学
	動物機能調節学	栄養生化学	栄養生化学　栄養資源学　栄養代謝調節学
		応用生理学	一般生理学　応用生理学　生体機構学
		応用免疫学	基礎微生物学　感染機構学　応用免疫学
		生体情報受容学	基礎生化学　動物行動学　動物環境調節学
植物資源学科	資源植物学	資源植物生産学	食用資源植物学　緑化・草地資源植物学　産業資源植物学
		植物育種学	植物育種学　植物育種方法論　植物細胞育種学
		資源植物開発学	資源植物開発学
	園芸資源学	果樹科学	果樹資源学　果樹園芸学　木本植物繁殖論
		花卉野菜科学	環境園芸学　花卉資源学　野菜資源学
		資源利用科学	園芸資源利用学　収穫後生理学　植物成分分析学
		園芸植物生理生化学	園芸植物生理学　園芸植物生化学
	食料環境経済学	食料経済学	食料経済学　農業発展論　食料政策
		食料生産管理学	食料生産管理学　農業計算学　協同組合論
		食料情報学	食料情報学　食料流通論
生物環境制御学科	生物環境学	土壌学	基礎土壌学　土壌生態学
		植物栄養生理学	植物栄養生化学　植物栄養生理学
		生物環境応答学	植物環境保全学　生物環境応答学
	植物機能制御学	熱帯植物学	熱帯有用植物学　熱帯植物環境学　植物組織培養学
		植物遺伝学	遺伝学　形質遺伝学　細胞遺伝学　分子遺伝学
		国際遺伝資源学	国際遺伝資源学
	生物制御学	農薬生化学	農薬生化学　農業環境化学　生物反応工学
		植物病理学	基礎植物病理学　植物病原微生物学　植物感染分子生物学
		昆虫科学	基礎昆虫学　進化生態学　昆虫機能生理学
		生物制御学	生物制御工学概論
生物機能化学科	生物機能分子化学	生物化学	蛋白質・酵素化学　核酸生化学　糖質及び脂質生化学
		食品・栄養化学	食品機能化学　食品生化学　栄養機能化学
		有機機能分子化学	有機機能分子化学　有機分析化学
		高分子機能化学	高分子機能化学　遺伝子機能化学
	生物機能利用学	植物資源利用化学	植物資源利用化学　食品製造化学
		動物資源利用化学	動物資源学　動物性食品利用学　動物資源利用学
		微生物機能化学	微生物機能学　微生物機能化学1.　微生物機能化学2.
		機能性生物資源化学	生物機能工学　応用微生物学
生産環境情報学科	生産環境学	水環境学	かんがい・排水工学　応用水文学1.　水利施設工学1.
		土地環境学	生産基礎工学1.　生産基礎工学2.　土壌物理学
		地域環境学	生産環境論　地域計画論　環境工学
		環境情報学	環境気象学　写真測定とリモートセンシング　応用情報工学
	生物生産工学	生産機械学	生物生産機械工学　生産システム工学　生産機械制御論
		プロセス工学	ポスト・ハーベスト工学　生産プロセス工学　プロセス・システム工学
		生産情報学	生産情報論　情報処理法　生産情報工学
		生産計画学	生産計画論　生産技術論　生産経営工学

神戸大学農学部での生活をふりかえって

東　順三

六篠会会報委員の杉本様から、上掲の題目で会報の原稿を書くように依頼されて、原稿用紙を受取ったのが、猛暑のまっ最中の8月10日。余りの暑さで、少し涼しくなったら、とりかかろうと思っていた。ところが、残暑は一向に劣えをみせず、ついに締切日が迫り、気分がのらないまま、敢えて筆をとった有様です。しかし、この記録的な暑さを、定年退職の後に迎えられたのは、せめてもの好運であったかなと、消極的な感懐にひたっている今日です。

さて、本題に立ち返って、農学部の生活をふりかえれば、何といっても六篠会との関りでは、創会以来、30年近くも副会長の要職を務めたことです。本会は年々の会員の増加に伴って活況を呈し、神戸大学の他学部の同窓会と比較しうるまでに充実してきました。これは関係委員の盡力によるものと敬意を表する次第です。ところが、小生は副会長にふさわしいような役割が果せないことが心苦しくて、何度か西川会長に辞任の申出をしたのですが、その都度、役員制度の実況がネックとなって、願いが受入れられず、今日に至るまで留任を重ねてきました。目下、懸案になっている代議員制度への変換が実現すれば、このお役はご免していただけると思い込んでいる。こんなに長期に及んだ副会長であったにも拘らず、本会に貢献できた自慢話が1つも思い出せないのが、我ながら残念で、この機会をかりて、会員の同窓諸兄に、無能ぶりをお詫しておく必要があるかと、思っている。

篠山の田舎から、港の見える神戸の六甲台へ学舎が移った当時は、阪急六甲駅から学舎に向う坂道を歩いて登る運動が、肥満気味の出っ腹をへこめるのに役立つような気がして、バスに乗らずに歩きとおした。当初は若い学生と殆んど同じテンポで活発に歩けたが、年を重ねるにつれ、歩調は低下し、後から来る学生に次々と追抜かれるようになり、とうとう定年を迎えた。体力的にも時宜を得た退職かな、とも思った。

六甲台へ移った当初は、篠山で学んだ学生と六甲で学んだ学生が同居していたせいか、神戸大学という意識が薄かった。しかし、学内の委員会への出席や、共同機器の利用を通して、他学部との交流が増え、段々と神戸大学にとけ込んでゆけた。とくに、自然科学研究科（大学院博士課程）の設立以降は、組織的にも理学部や工学部の先生方とは同居するようになり、総合大学としての実感が湧いてきた。また、これと併行して農学部自体も学科組織の編制が進み、ドクターコースのある総合大学の学部にふさわしい充実を迫られ、今後は大学院重点の総合大学へ向けて大いなる進展が計られている。

神戸大学の農学部に限ったことではないが、日本の各大学で著しい改革が競って進められている現況である。かっての大学では、象牙の塔として、研究活動が主体とされていた。しかし、今後は教育にも視点をおいて、授業の質の向上などを通して、学生の指導の有り方などにも厳しい要求が出てきた。また、教育研究活動を改善するために、教官の自己点検、評価なども制度として取り入れられそうである。

大学が、このようにきびしい時に、退職できたのは好運だったかなと、内心ホットしている。

日干しの河童

尾崎叡司

六甲の風光明媚な神戸大学へ私が赴任したのは、石油ショックの後遺症もまだ色濃く残っていた昭和51年であった。経済的不況の中で新設された土地利用工学講座が担当であったため、正に無一物からの出発を余儀なくされた。机と椅子それに本箱以外になにも見当たらない間借りの研究室で、さて、これから与えられた環境のもとでどのようなテーマを取り上げたら良いかを考えるのが当面の課題であった。金は無し、人手は無し、設備は無しで〝岡に上がった河童〟同然であった。

日干しの河童は様にならないので、先ず最も安上がりの紙と鉛筆と手持ちの書籍、雑誌と過去に実施した実験データを元にした解析的な仕事を細々と始めたのであった。

私は学生時代には研究者や大学の教官になろうという希望を持っていなかったので、大学院生のとき理学部や工学部の数学、力学や土木関係の基礎科目の聴講に時間をさいて自分の所属する学科の開講科目は興味のある二三の科目以外は全く手抜きしていた。この事のもっともらしい理由は少し高級な技術者になるために幅広く基礎的な学力を習得することが絶対必要であるということにしていた。

このように考えたのは実を言うと実習先の工事現場で基礎学力の不足がいかに惨めであるかを見せつけられたからである。しかしながら、このような学習態度は実にけしからんことのようで、しばしば皮肉の言葉を投げかけられたものであった。

岡に上がった河童が仕事を始めたとき、院生時代の放浪的な勉強が意外に役立って日干しの河童になることを免れたのであった。このような状況と私の担当科目が学生諸君がなかなか好きになれない構造力学や土質力学であったため相乗作用をおこして、極めて厳しく学生諸君を鍛えたので、学科の学生にとって特に専攻生にとっては苦い思いでとなっているのではないかと想像している。

当時、金のかからない、実験装置の簡単な、しかもだれもやっていない即ち文献の無いテーマを探して手掛けようというのが私の虫のよい口癖であった。

探しあぐねた末に採り上げたテーマに対して、実験装置を整備しながら実験観察したデーターを検討し、探し出された要因をいろいろの法則に照らしながら組み合わせ、また順序や配列を考えて筋の通った結果を導く作業が少しずつ進むようになったとき、創造的仕事に携わっていることが感じられ、神戸大学での最も楽しい時期であった。今顧みると全てのものに不足していた時、これを克服しようとして努力するため、かえって最も充実した期間となっており、また、それなりの成果も得られ当時の専攻生から多くの人材が輩出しているのに気づくのである。

研究生活と六篠会活動をふりかえって

西川欣一

平成六年三月三十一日付をもって、神戸大学を停年退官いたしました。

私の世代は、いわゆる典型的な『昭和一桁』で、戦前から戦後の食糧難と激動を経験しました。教育制度も神戸一中五年生を終ったところで、六三三四年制の新制度に切り替えられ、以後神戸高第一回卒、兵庫農大第一回卒、当時農大に大学院が設置されていなかったので、京大大学院に進学し、ここでも新制大学院第一回修了と、以後今日まですべて「新制第一回」の看板をぶら下げながら我武者羅に走りつづけてきたのが実感です。

先ず私の研究生活をふりかえりますと、農大の卒論はバレイショの育種に関するものでした。次ぎに院生時代は作物の呼吸生理に関するもので、対象作物は水稲、バレイショ、トウモロコシでした。

昭和三十年、兵庫農大に採用され、作物学の研究が一生の仕事となりました。当時は食糧難の時代で、かつ日本作物学会の主流が水稲の研究であったので、水稲の栄養生理、特に炭水化物の生産および行動に関するもので、水稲が本格的な研究対象となりました。しかし共同研究者の上司が学位申請に当たり、無機成分についてだけでは主査から不充分だと云われたので、君の研究分野である有機の炭水化物のデーターをすべて使わせてほしいと申し入れられ、当時の学内事情では、上司が学位取得を完了しなければ、下位の者は本格的な自分の研究ができない風潮であったので、助教授昇任に伴なう「飼料作物学」の講義担当を機に、アルファルファの生理的特性に関する研究に転換し、これが私のその後の研究テーマとなりました。

昭和四十二年、神戸大学に国立移管となり講座の研究体制が、水稲、アルファルファ、クズの三本立となり、教官、院生、学部専攻生の協力を得ながら無事、停年を迎えました。

作物の性質を明らかにする作物学は、農業の発展、作物収量の向上を最終目的とする実用学でありますから私の研究方法は Eco-physiological な研究だったと思います。

もう一つの思い出は六篠会々長としての同窓会活動です。昭和四十九年、開学二十五周年に、農大・農学部卒業生を一本化した現在の「六篠会」が誕生し、当時四十万円の資金から出発した会計が、今では学術振興基金を中心に約三千万円の規模に拡大しました事は真に御同慶の至りです。以後五年毎に開催された記念事業の中で、最も印象に残るものとしては、幹事役員の皆様のご努力と、多くの同窓生のご寄附により、昭和五十九年に学部創立三十五周年を記念して、発祥の地記念碑『我等が青春ここにあり』を篠山の農大跡地に建立したことです。この碑の写真は「神戸大学学報四三八号」と「六篠会報五号及び六号」に掲載されました。その記念碑除幕式に出席下さった当時の学長、堯天義久先生が「君の書いた碑文は石に刻まれているから、後世まで残りますよ。」と云われた言葉が今も忘れられません。

おわりに、いろいろご支援いたゞいた同窓の皆様に厚く御礼申し上げますと共に、農学部の益々の発展を祈念してやみません。

神大農学部での生活をふりかえって

山口禎

学会の懇親会、ときには農学部の廊下で神戸大学農学部に何故熱帯有用植物学の講座があるのかとよく尋ねられた。

神戸大学は熱帯の農産物の集散地である神戸港と伊丹空港が近くにあること、それから発展途上国の農業開発に役立つ研究と人材を養成するために設置されていると答えている。

これらの答は、一般社会や文部省に納得させられるものと思っているし、また、事実これらのことを念頭において研究教育を続けてきた。

しかし、心の中にはうまく説明できないもう一つの設置理由があった。それは日本の農学部の栽培学ないしは作物学は、日本の作物に関する研究、教育に限られている。私は広い視野でこれらの科学を、例えば作物学を熱帯有用植物学というようなかたちで研究教育することが重要であると考えていた。このことは漠然としていて相手に理解してもらうためには色々と説明が必要なのであまり口にしなかった。

このことについて経験からいうと、かなり以前のことであるが、イネの節間伸長は、花芽の分化形式と密接に関連しているといわれていた。即ち、花芽の分化形式がおこりだすと節間が伸長するということである。また、このことを逆に利用して節間が数ミリに伸長したとき、花芽の分化形成期で、これを基準にして追肥の時期を考えるという説である。

東南アジアやアフリカに浮イネという栽培稲がある。この浮イネの世界の栽培面積は、日本の水稲栽培面積の10倍位あり、栽培面積という点からは日本の水稲よりも重要である。

このウキ稲は、水位の上昇と共に節間伸長をおこし、通常は1ないし2mの深水状態下で栽培される。しかし、ときには4mもの深水下で栽培される、その場合節間長は4mにも達する。一目瞭然に節間伸長と花芽分化とは無関係であることが理解される。節間伸長の例一つとっても多く国の稲品種の比較、即ち、広い視野での研究が必要であると思う。

当時の日本の稲作は、節間伸長の比較的少ない品種が栽培されていて、花芽の分化形成と共に節間伸長をおこしていたのであろう。これはこれで正しいことである。しかし、栽培稲全体にあてはまることでない。後にある学会誌に節間伸長には、花芽の分化形成と無関係な伸長と、花芽の分化形成と密接に関連した伸長があることが発表されて、この問題はけりがついた。

学生の時、昆虫学の講義で、英国の昆虫学者は、インドへ留学した経験をもたないと、一流とはみなされないということを聞いた。

熱帯は昆虫の種類が多く、多様な形態か生態が観察されるからであろう。昆虫に限らず植物も種類が多く、節間伸長のように日本では顕微鏡を持ち出して観察されるものが、熱帯の浮イネでは物差しで測定される。国際都市にある神戸大学農学部は、やはり広い視野での研究教育が必要と思う。

共同研究開発センターの組織と活動

センター長　金田忠吉

文理農学部の正門を入ってすぐ右手に二階建ての比較的新しい建物がある。学内（学部内ではなく）や民間機関等との共同研究・研究交流をすすめ、社会との連携協力事業を実施する場として、また総合的な研究開発に資することを目的として、一九八七年に全国の国立大学のトップを切って新設された当センターである。その後毎年5大学ほどずつに設置され、組織はほぼ共通して専任助教授一名と併任の正副センター長、三名前後の客員教授から成っている。当センターの客員教授は三年以内の任期で共同研究をおこなう企業機関から選任される。本年は㈱ヤトロンから喜多寛氏、塩野義製薬㈱から林幸之氏、三菱電機㈱から塚田紀昭氏をお願いしている。

他の多くの大学のセンターが工学系なのに対し、本学では生物系を中心においてきたのが特色であるが、昨年度からは工学部のより積極的な支援をお願いして副センター長に西野教授（電子材料・半導体）の就任を得、塚田博士との共同研究を進めて頂いている。

喜多博士は大川教授と農薬の免疫化学的分析法の開発、林博士は加藤肇教授と病原糸状菌の化学制御について、それぞれ共同研究を行っている。この他、センターとしてはセンター長が㈱神明と新規形質（品質食味）稲の開発改良について、脇内専任教官がパピルスの組織培養の共同研究を進めている。また客員教授には公開セミナーの講師を前期、後期各一回ずつお願いしている。

センターが毎年行う事業として大きな比重を占めるものに、民間機関等の技術者に対する研修がある。農学部教官と客員教授によるテキスト作成、講義及び実験指導によって、平成四年までの三か年間はバイオテクノロジーコースを定員十五名で実施してきたが、昨年からは定員十名の生物分析化学コース（五日間）を開講している。

センターの業務として第一に掲げているのは学内の共同研究であるが、センターから要求して設置される機械設備・施設は学部の先生方から重宝されているものが多い。昨年度は蛋白質・DNAシーケンサーや遺伝子導入装置（パーティクルガン）が入った。これまでに整えられた主要設備については、当センターの年報を参照いただきたい。

年報は、共同研究や当センターを利用して行われた研究の成果を収録するもので、今年は平成五年度分の第五号になる。刊行物としては他に本年度から、手作りでB5版四頁のセンターニュースを季刊で発行している。

センターの公的な庶務・会計事務は農学部事務室が処理しているが、日常的な事務を担当するのは非常勤の長谷川さん（近く姓が変わると聞いた）である。センター長は時々彼女からパソコンの操作法の指南をうけている。

今年の技術者養成研修（講義）の様子

JICA研修コースについて

生物機能化学科教授　新家　龍

神戸大学農学部は、JICA（国際協力事業団）、HIC（兵庫インターナショナルセンター）とともに、これまで外国人受託研修員を受け入れ、彼らの研修・教育に協力してきた。

まず、昭和48年から平成4年までの20年間にわたって35カ国から224名の研修員を受け入れてきた「稲病害虫防除集団研修コース」は、平成5年度から「植物保護のための総合防除コース」（コースリーダー・加藤肇教授）として再出発している。

又、昭和52年にスタートした「農薬の利用と安全性コース」（コースリーダー・大川秀郎教授）は、これまで約30カ国から約120名の研修員を受け入れ、各国の農業関連分野の発展に貢献してきている。

さらに、バイオテクノロジーに対する世界的関心を背景として、平成元年に神戸大学農学部に開設された「植物及び微生物を利用するバイオテクノロジー集団研修コース」（コースリーダー・新家　龍教授）は、平成5年度から「バイオテクノロジー集団研修コース」と改名して、バイオテクノロジー分野の研修・教育に努力を続けている。これまでにインドネシア、タイ、アルゼンチン、マレーシア、フィリピン、中国、メキシコ、ブラジル、シンガポール、イラン、エジプト、チリ、コロンビアなど約15カ国から男女合わせて約40名の研修員を受け入れてきた（5面表参照）。バイオテクノロジー集団コースの研修内容は、①講義（バイオテクノロジー概論、遺伝学、生化学、食品化学概論等）、②実験・実習（DNAの分離と取扱い方、遺伝子工学的手法による微生物の育種法、植物の組織培養等）、および③研修見学（白鶴酒造㈱、アサヒビール㈱、林原㈱、住友化学㈱、農林水産省研究所・センター、鐘淵化学工業㈱、サントリー㈱、㈱島津製作所、日製産業㈱など）の3本柱からなっており、神戸大学農学部、兵庫県立中央農業技術センター及び兵庫インターナショナルセンターが主要受入れ先となっている。

これら研修コースは、神戸大学農学部の教職員をはじめ関係センターの職員及び企業の関係者各位のボランティア的協力がなければ実施できないものである。しかし、各研修員が帰国後、研修期間中に習得した理論と技術をそれぞれ応用し、人類生存の鍵を握る食糧・料、医薬などの生産や環境保全のために貢献できれば、研修コースの主目標を達成できることになる。

このように、各研修コースの修了者（約360名）が既に世界各地で活躍しており、各国の発展に貢献しているものと期待している。さらに、21世紀に向けて国際社会への貢献の一つとして、また神戸大学の国際交流推進の一つとして各研修コースの果す役割の重要なことを改めて感じている。

JICA 植物保護のための総合防除コース

生物環境制御学科教授　加藤　肇

外務省の外郭団体である国際協力事業団を通じて、わが国の対外援助が行われていることは衆知の事実である。その一翼として人材育成を目標に、鈴木直治先生により二十年にわたって続けられた「稲病害虫防除コース」を受け継ぐ形で、標記のコースを神戸大学で設定し、平成五年から研修生を受入れている。

農業技術の向上に伴い、植物保護の領域で次々と問題が起り、対応がせまられるのは各国共通の悩みである。温帯のわが国で育った技術には、他国で直接適用できるものとできないもの、改良を要するものなどがある。そこで、研修員に広く見聞を広めてもらい、自らの手で問題解決に取り組むための実力向上を計るのが本コースの目的である。

平成五年には、ネパール、パキスタン、フィリピン、ガーナから各一名、タイから二名、平成六年はタイ、フィリピン、インドネシア、コートジボアール、ザンビア、パナマ、パラグァイから各一名が参加した。この内七名は修士である。

スケジュールは日本語・日本文化の学習、植物保護関係の講義・実験・見学旅行からなっている。講義は一日一課題、十六回で、本学および他大学教官、農水省、企業の方々にお願いしており、最新の情報をスライド、ビデオ、多くの資料で伝えている。実験は、予め本人達の希望を聴取しておき、旧植物防疫学科の各講座に配属し、各自がテーマを持って技をみがくことを目標にしている。帰国後、自分で研究や指導を行う時に役立つことを願っている。見学旅行は国、県、農家レベルの研究や農業の実態を体験できるよう配慮してある。兵庫県農業技術センター職員の協力により、農家圃場における病害虫の発生調査を「発生予察事業要網」に基づいて実地に行い、県農技センター、北部農技センター、淡路農技センターを見学し、その機能と実際を学ぶ。県レベルの機関としてはさらに広島農業技術センターを訪ね、発生予察や生育診断などへのコンピューター利用の現状を視察する。国の機関としては、中国農試、東北農試水田利用部（秋田）および地域基盤部（盛岡）、野菜・茶試および果樹試、林試の盛岡支場、つくば市の農業研究センター、農業生物資源研究所の研究の現状施設、圃場などを視察する。民間機関としては住友化学工業株式会社、大塚化学株式会社の研究所において農薬開発の現状を学んでいる。原爆資料館、ファームパーク、農協、農業高校についても見学を組み込んでいる。

参加者は、各国の研究・大学・行政機関の中枢に座る人達であり、ここで得た経験、知識、交友関係は、本国の発展はもとより、わが国との友好関係にも寄与するものと信じている。各講座の学生にとっては、研究室で日常生活を共にすることによって、相互理解を深めるとともに、語学の訓練にもなっている。各国の農業事情についての報告会（カントリーリポート）は公開しているので、学生・教官各位のご参加をお願いしたい。今年は生物的防除など自国の現状を示すビデオを持参した者もいて、われわれも教えられるところが多い。各国のくせのある英語に接するのも一興であり、国際会議で役立つものと思う。各研究室に留学生の数は増加しているが、短期滞在で見聞を広めてもらうには、本コースの利用が有効だと考えている。御協力いただいている学外の皆様、本学の事務官、教官に深謝したい。

JICA『農薬の利用と安全性』コース

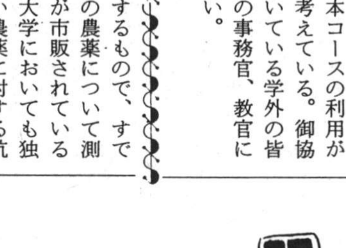
生物環境制御学科教授　大川秀郎

本集団研修コースはこれまでの『農薬利用』を『農薬の利用と安全性』に改称して、従来に比べて農薬の安全使用に重点を置いている。今年で17回を数え、これまでに、アジア・アフリカ・中近東・中南米・その他の地域を含めて約30ケ国から合計一一二名の研修員を受け入れた。研修員は大学○試験研究機関の研究員と行政官がほぼ半数づつを占めている。毎年3月から8月にかけての約6ケ月に渡って、主に、産官学の約35名の講師による広範囲にわたる講義、それに加えて、日製産業㈱、兵庫県立中央農業技術センター、厚生省国立衛生試験所大阪支所、神戸大学農学部における実習、および、農林水産省、兵庫県の試験研究機関、農業団体並びに農薬関連企業の試験研究所の見学などの広範囲にわたるプログラムから構成されている。とりわけ、農薬残留分析の技術と知識の習得には重点が置かれて、各種分析機器の取り扱い、残留農薬分析の実習、安全使用のための分析技術の習得など多くの時間が費いやされている。

神戸大学農学部はコースリーダーと数名の先生方の講義、並びに、免疫化学測定法の実習を担当している。残留農薬の免疫化学的測定法は世界的にもこれから発展する新しい方法で、バイオテクノロジーを用い、国内では神戸大学のみで実施できるユニークな技術である。目的の農薬の誘導体を蛋白質に結合したものを免疫原として動物に免疫して得られた特異抗体を用いて酸素免疫学的手法で残留農薬を測定するもので、すでに、数種の農薬について測定キットが市販されているが、神戸大学においても独自に新しい農薬に対する抗体を開発している。従来の機器分析法は、高価な機器設備や熟練を必要とし、しかも、分析に時間が掛り、短時間に多数のサンプルを処理することが難しく、結局、経費が高くなる。それに比べ、免疫化学的な測定法は、すでに臨床検査などで使用されており、それほど熟練や高価な設備を必要とせず、短時間に多数のサンプルを処理でき、従って、安価になる。こうした簡易測定法は、輸入農産物の残留農薬の測定、環境汚染物質による水資源、土壌などの汚染のモニターリングなど多数サンプルの迅速測定に最適である。特に、開発途上国では有効な手法と思われ、将来の発展を見越して、JICA研修で取り上げ、技術・知識の普及に努めている。

研修員はそれぞれ異なるバックグラウンドを持ち、また、関心も異なっている。従って、同じコースメニューを与えるだけでは満足されないので、最終的に、個別研修の時間を設けて各自が自主的に勉強できるように配慮している。

こうした数々の工夫の積み重ねの結果、本コースは多くのコースの内でも、評判が高いと云われている。



アメリカ大西部の中の州立大学

生物環境制御学科植物栄養生理学　末吉　邦

1992年5月31日夕刻に成田を発った私たちは、翌日の午後シアトルで36人乗りの双発機に乗り換え、さらに1時間ほど飛んでようやくプルマン空港に着きました。空港ではワーナー教授ご夫妻が笑顔で出迎えてくれましたが、私たちの方は着陸の際の緊張ですっかり青くなっていたようです。この翌日からワシントン州立大学作物学科での1年10か月間の研究生活が始まったのでした。

ワシントン州は、アメリカ合衆国の太平洋岸部に位置し、北はカナダと接しています。ワシントン州の風土は、カスケード山脈をはさんで東西で大きく異なり、西側の太平洋岸部は年間を通じて過ごしやすく冬でも温暖です。中核都市のシアトルは美しい入り江と森に囲まれ、アメリカでもっとも住みたい街の一つに数えられています。一方、カスケード山脈の東側に広がるコロンビア盆地は、茫然とした風景が延々と続く半砂漠の乾燥地です。この地域の気候は厳しく、年間降水量は千ミリにも満たず（そのほとんどは冬期の降雪による）、気温は夏に40度近くに上がり、冬には零下20度近くまで下がります。プルマンは、そのコロンビア盆地のちょうど東の端に位置し、アイダホ州と接している人口2万人たらずの小さな町です。1880年頃、3人の入植者がこの地に入って開拓が始まり、1888年には、ワシントン州立大学の前身となる農業大学がすでに開学されています（当時学生数は28名）。およそ一世紀を経た今、農業大学は学生数1万6千人を擁する総合大学へと発展してきました。今日、コロンビア盆地は、リンゴ、ブドウ、麦および肉牛の一大生産地となっていますが、これを支えたのがワシントン州立大学農学部といえます。例えば、私が所属していた作物学科からは、これまでに多くの小麦や大麦の優良品種が世に出されてきました。それ故なのか、プルマン市長は代々作物学科の卒業生から選ばれるそうです。農学部の研究者のおよそ3分の1は米国農務省の研究者ですが、大学教官との区別は全くなく、学生の指導も行っていました。教育研究予算の実質的削減で苦しんでいるのは米国の大学でも同様ですが、この農学部においては農務省の財源と大学の豊富な人材とがうまくかみ合っていたような印象を受けました。

プルマンは、町自体はとても小さく、まわりは行けども行けども麦畑です。周辺に点在する村々は西部開拓時代の雰囲気を色濃く残しています。私たちは滞在中、人々の素朴な暮らしぶりやアメリカ先住民の苦難の歴史など多くを知ることができましたし、日本とはまた違った自然の厳しさ、美しさを満喫できました。最近、神戸大学農学部とワシントン州立大学が姉妹校となり、両校の交流が今後一層盛んとなると思います。一人でも多くの皆さんがプルマンを訪ね、アメリカ大西部の醍醐味を味わっていただきたいと思います。

竹内　正氏逝く

平成5年暮れの31日志半ばにして逝ってしまった竹内　正氏に哀悼の意を申し述べたいと思います。氏は昭和37年3月兵庫農大を卒業と同時に、将来を嘱望されて母校の植物病理学研究室に残られました。爾来、山本、宮本、加藤教授のもとで、ウイルスに関する研究に従事するとともに学生の指導にあたって来られました。とくに、学生に対して厳しい中にも献身的といってよいほどの面倒見のよい先輩であり、先生でありました。指導を受けた多くの学生が現在社会の第一線で活躍していることが、氏の喜びであり、誇りでもありました。

氏とは同郷で、昔から親しく付き合ってきた仲でしたが、公私にわたって何事も親身になってやってくれました。家族ぐるみで阪急ブレーブスの選手と付き合いするほどの熱烈なファンでよく連れていってくれたことや見かけによらず色々と行きつけの飲み屋を知っていてお伴してくれたことなど思い出はつきません。白衣を着て胴乱を肩にかけ、よく実験用植物の採集に出掛けていましたが、もうその姿を見ることは出来ません。

以前より咳き込みの持病を抱えて、色々と本人は養生に努めておりました。几帳面で、神経細やかな性格でしたが、病院では毎日体調を細かく記録して自分なりに納得して病気とたたかっていたようです。病床を訪れたとき、いつも窓の外を見ては大学におもいを馳せ、出勤できる日を心待ちにしている光景が目に焼き付いて離れません。もう一度教壇に立ちたい、この一念が長い闘病生活の中で心の支えとなっていたように思われます。しかしながら、氏の願いは叶えられず、奥さんの手厚い看護の甲斐なく遂に完治することなく若くして帰らぬ人となってしまいました。本当に惜しい人を失ったと残念に思うと同時に、今もって信じられない気持がします。謹んでご冥福をお祈りします。

（前川　進）

御遺族から学術振興基金に御寄付がありましたことを報告し、御礼申し上げます（会計係）。

六篠会会員異動のお知らせ（名簿の変更をお願いします）

氏名	住所、電話番号	勤務先、住所、電話番号	氏名	住所、電話番号	勤務先、住所、電話番号

研修受入れ実績表

国名　年度	平成元	2	3	4	5	6	合計
中国	1		1				2
インドネシア	1	1	1	1	1	1	6
シンガポール				1			1
マレイシア	2		1				3
フィリピン	1	1					2
タイ	1	1	1	1	2	2	8
エジプト				1			1
イラン			1				1
アルゼンティン	1	1	1	1	·1	1	6
ブラジル	1		1		1	1	4
チリ		1			1	1	3
コロンビア				1			1
メキシコ		1		1	1	1	4
チュニジア					1	1	2
合計	8	6	7	7	8	8	44

庶務報告

平成4年4月28日
平成4年度定期役員会
於　金龍閣
議事録は江口氏
欠席者に会議資料配布

平成4年5月19日
弔電　藤井貢氏（神C3）

平成4年5月26日
入会金催促

平成4年7月5日
弔電　名誉教授吉村貞彦先生

平成4年8月3日
弔電　水野進先生のご母堂

平成4年8月27日
KUC講演会開催
講師大阪電気通信大学教授沖野政弘氏
演題　ドイツとドイツ人に学ぶ

平成4年9月19日
弔電　高橋竹彦先生のご母堂

平成4年9月27日
弔電・花輪　名誉教授岡本三郎先生

平成4年10月23日
学内常任幹事会
於　LANS　BOX
○役員の交代について
○代議員制度について
○その他

平成4年11月2日
祝電　森俊人氏

平成4年11月30日
弔電　上島脩志先生ご尊父

平成4年12月14日
弔電　栗田秀造氏（神C18）

平成5年2月1日
卒業前に入会金催促

平成5年2月8日
弔電　王子善清先生のご母堂

平成5年2月10日
学内常任幹事会
於　共同研究開発センター
○次期総会に向けての諸問題について
○その他

平成5年2月19日
卒業証書筒600本受領

平成5年4月1日
弔電　中村五郎先生

平成5年4月7日
会計監査
於　副会長研究室
学内常任幹事会
於　LANS　BOX
○平成5年度定期役員会についての打合わせ
○その他

平成5年4月23日
平成5年度定期役員会
於　金龍閣
議事録は江口氏
欠席者に会議資料配布
○平成4年度経過報告
○平成4年度会計報告
○平成5年度役員選出
○平成5年度事業計画
○会則及び代議員制度について
○その他

平成5年5月13日
KUC講演会開催
講師西川欣一会長
演題　日欧米の食糧事情
六篠会担当—名札、会費徴収、会場セット

平成5年5月31日
入会金催促

平成5年6月8日
弔電　藤井聰先生のご尊父

平成5年6月17日
学内常任幹事会
於　LANS　BOX
○渡航援助規定の運用について
○その他

平成5年8月30日
海外学術活動援助者選考委員会（森直樹先生、吉田雅夫先生、玉城一先生に援助金を贈ることを決定）

平成5年9月2日
弔電　芦田（足立）正富氏（鶴1）

平成5年9月12日
弔電　中村千春先生のご尊父

平成5年10月17日
弔電　高橋竹彦先生のご尊父

平成5年11月25日
弔電　加古敏之先生のご尊父

平成5年12月13日
弔電・花輪　名誉教授近藤健次郎先生

平成5年12月17日
学内常任幹事会
於　農学部応接室
○停年退職六篠会役員の祝賀会について
○その他

平成5年12月31日
弔電・花輪　竹内正先生

平成6年1月31日
学内常任幹事会
於　農学部応接室
○平成6年度役員総会について
○その他

平成6年2月1日
卒業前に入会金催促

平成6年2月6日
弔電　中村弘氏（専門部旧教官）

平成6年3月14日
弔電・花輪　名誉教授伊沢悟郎先生

平成6年3月22日
学内常任幹事会
於　愛蓮
○平成6年度役員総会について
○その他

農学部教官名簿（自然科学研究科関連教官を含む）

平成6年11月1日現在

学科	講座名	研究分野名	教授	助教授	助手	旧講座名
応用動物学科	応用動物遺伝学	遺伝生化学	辻荘一		万年英之	家畜育種学（Z）
		生殖生物学		河南保幸 宮野隆		
		発生工学	加藤征史郎（評議員）	三宅正史☆		家畜繁殖学（Z）
		統計遺伝学		向井文雄		
	動物機能調節学	栄養生化学	氷上雄三 長谷川信☆			家畜飼養学（Z）
		応用生理学	豊澤敬一郎		杉原一三 千田廉	家畜管理学（Z）
		応用免疫学	清水晃	河野潤一	西藤岳彦	家畜衛生学（Z）
植物資源学科	資源植物学	資源植物生産学	津川兵衛	巽二郎	鬼頭誠	作物学（A）
		植物育種学	上島脩志		石井尊生	作物育種学（A）
		資源植物開発学	加古敏之	三十尾修司		資源開発学（A）
	園芸資源学	果樹科学	吉田雅夫	中西テツ	野村啓一	果樹園芸学（A）
		資源利用科学	土田廣信	寺井弘文	水野雅史	保蔵加工学（A）
		花卉野菜科学	前川進（農場長）	稲垣昇	金地通生	花卉蔬菜園芸学（A）
	食料環境経済学	食料経済学	内田幸夫			
		食料生産管理学	堂本高明		金子治平	農業経済学（A）
		食料情報学	保田茂	髙田理	家田貴子☆	農業経営学（A）
生物環境制御学科	生物環境学	土壌学		髙橋竹彦	藤嶽暢英	土壌学（C）
		植物栄養生理学	王子善清	杉本敏男	末吉邦	植物栄養学（C）
	植物機能制御学	熱帯植物学	安田武司	内田直次	東哲司☆	熱帯有用植物学（A）
		植物遺伝学	金田忠吉（共同研究開発センター長）	中村千春	森直樹	防疫遺伝学（P）
	生物制御学	植物病理学	加藤肇	真山滋志	中屋敷均	植物病理学（P）
		昆虫科学	桃井節也	竹田真木生		農業昆虫学（P）
		農薬生化学	大川秀郎	中田昌伸	今石浩正	農薬学（P）
		生物制御工学	内藤親彦			
生物機能化学科	生物機能分子化学	生物化学	岩崎照雄（農学部長）	山形裕士	宇野知秀	生物化学（C）
		有機機能分子化学	岸原士郎	三宅秀芳		
		食品・栄養化学	団野源一	金沢和樹	芦田均	食品及び栄養化学（C）
		高分子機能化学	相薗泰生		白井康仁☆	生物機能利用学（C）
		生物機能物理化学	幡山文一	大野隆		
	生物機能利用化学	植物資源利用化学	藤井聰（自然科学研究科長）		玉城一	農産製造学（C）
		微生物機能化学	新家龍（評議員）	青木健次	村上周一郎	醸酵生産学（C）
		動物資源利用化学	西川勲	岡山高秀	山之上稔	畜産製造学（Z）
		機能性生物資源化学		南森隆司		
生産環境情報学科	生産環境学	水環境学	畑武志	田中勉	多田明夫☆	水利用工学（T）
		土地環境学	堀尾尚志	杉原雄		
		地域環境学	石田陽博	内田一徳	阪口秀	土地利用工学（T）
	生物生産工学	生産機械学	山本博昭		徳田勝	農業動力学（T）
		生産情報学	小堀乃	川村恒夫	庄司浩一	圃場機械学（T）
		プロセス工学	児島初男	豊田浄彦		農産機械学（T）
附属農場				松井範義 尾崎武 保坂和良	南條巌 楠比呂志 小林伸哉	

共同研究開発センター	助教授	脇内成昭	客員教授	喜多寛・塚田紀昭・林幸之
生物環境制御学科教務職員		安原昭江		

（注）☆は自然科学研究科所属教官、旧講座名のあとの（　）は各々、
A：園芸農学科、P：植物防疫学科、T：農業工学科、C：農芸化学科、Z：畜産学科を示す。

海外学術活動援助規定のお知らせ

六篠会では、海外で開かれる学会等へ行く旅費を援助する目的で、以下の規定を定めました。応募を希望される方は六篠会まで御連絡下さい。

海外学術活動援助規定

目　的：神戸大学農学部の発展のための海外学術活動援助

援助額：援助総額は年間75万円とし、原則として１人15万円とする。

応募資格：農学部教官あるいは本会会員で農学部教官の推薦を受けた者で、当該年度内に外国で開催される国際会議等に自費で出席し、研究発表する者。但し、以下の者は除く。：
　１）過去３年以内に本会援助または山口誓子基金援助を受けた者。
　２）学会、企業等、他の団体からの援助を同時に受ける者。

応募手続き：毎年５月末日までに以下の書類を提出する。当該年の４月及び５月中に渡航した者も応募できる。
　１）所定の申請書を１部。（本会庶務担当幹事に請求のこと）
　２）海外学術活動を証明するコピーを１部。
　３）農学部教官の推薦状を１部（農学部教官を除く）

応募者には、６月上旬に選考結果を通知する。

その他：本会の援助を得て国際会議等に出席した者は、六篠会報への渡航記事の原稿執筆を依頼されることがある。

平成６年度六篠会役員

会　　長　西川　欣一（A１）
副 会 長　東　　順三（C１）
　　　　　久保　一兵（C２）
　　　　　能宗　康夫（C２）
　　　　　北浦　義久（A６）
常任幹事
幹 事 長　新家　　龍（C５）
庶　　務　藤嶽　暢英（神C17）
会　　計　野村　啓一（神C14）
会　　報　杉本　敏男（神C６）
名　　簿　金地　通生（神A14）
　　　　　能宗　康夫（C２）
監　　事　小山　美幸（A４）
　　　　　内藤　親彦（A13）
幹　　事　山口　　禎（A１）
　　　　　久下　　平（C１）
　　　　　田中　平義（C１）
　　　　　切貫武代司（K１）
　　　　　石田　陽博（A２）
　　　　　前川　　進（A３）
　　　　　中谷　吉実（A４）
　　　　　鍋山　郁夫（A４）
　　　　　森　　俊人（A４）
　　　　　藤井　　聰（C５）
　　　　　津田　安啓（K５，C８）
　　　　　氷上　雄三（Z６）
　　　　　西浦　康二（A７）
　　　　　酒井　　進（C７）
　　　　　山内　　脩（A９）
　　　　　杉原　一三（Z９）
　　　　　中田　昌伸（C10）
　　　　　岸原　士郎（C10）
　　　　　岡沢　秀晃（Z11）
　　　　　河南　保幸（Z11）
　　　　　津川　兵衛（A11）
　　　　　山本　博昭（A12）
　　　　　王子　善清（C12）
　　　　　辻　　荘一（Z12）
　　　　　永吉　照人（A13）
　　　　　高橋　竹彦（C13）
　　　　　脇内　成昭（C15）
　　　　　西尾　　司（Z16）
　　　　　中村　直彦（神Z１）
　　　　　寺井　弘文（神A２）
　　　　　武　　正興（神C３）
　　　　　山木　康雄（神T４）
　　　　　向井　文雄（神Z４）
　　　　　山形　裕士（神C５）
　　　　　三十尾修司（神A６）
　　　　　芦田　　均（神C14）
事 務 局　江口　庸平
KUC運営委員：西川　欣一
　　　　　　　新家　　龍
　　　　　　　石賀　暢一

DI:ダイアル・イン　(078)803－…

編集後記

・９号発行から、昨年の名簿発行をはさみ2年余りたち、その間に神戸大学農学部も大きく変りました。本号記事で、その一端を理解いただければ幸甚です。不十分な点も多々あるかと思いますが、お気づきの点がありましたら六篠会あてにお知らせ下さい。

・新たに会員異動（六篠会に報告のあったもの）と農学部の人事異動についての欄を設けました。名簿をより充実したものにするため、努めて行きたいと考えておりますので、御協力をお願い申し上げます。

原稿募集

同窓会・会報への御意見、御要望、母校の想い出、学科・同期会・研究会など各種会合の案内、近況通信、その他想い出のアルバム・資料等お送り下さい。

―会報係―

人事異動（平成４年７月１日～平成６年10月31日）

	氏　名		前職等（注：旧学科、講座名で示す）
4. 7. 16	藤嶽　暢英	助手採用	（自然科学研究科（土壌学））
9. 16	尾崎　叡司	農学部長再任	
	内田　幸雄	教授配置換	（教養部より）
	杉原　　雄	助教授　〃	（　〃　）
	三宅　秀芳	〃　〃	（　〃　）
10. 5	高田　達之	辞職	（畜産学科助手）
12. 1	竹田真木生	助教授昇任	（植物防疫学科助手）
5. 4. 1	豊国　永次	停年	（農業工学科教授）
	後藤　信男	〃	（畜産学科教授）
	木村　　重	〃	（　〃　）
	秋田　謙司	〃	（付属農場教授）
	畑　　武志	教授昇任	（農業工学科助教授）
	辻　　壮一	〃	（畜産学科教授）
	清水　　晃	〃	（　〃　）
	向井　文雄	助教授昇任	（畜産学科助手）
	河野　潤一	〃	（　〃　）
	田中　　勉	〃	（農業工学科助手）
	野村　啓一	助手採用	（園芸農学科果樹園芸学）
	鬼頭　　誠	〃	（　〃　作物学）
	藤井　　聰	自然科学研究科長	（併任）
	家田　貴子	助手採用	（自然科学研究科（農業経済学））
5. 1	児島　初男	教授昇任	（農業工学科助教授）
6. 16	中屋敷　均	助手採用	（自然科学研究科（植物病理学））
8. 16	小林　伸哉	〃	（付属農場）
10. 1	石井　尊生	〃	（園芸農学科作物育種学）
	千田　　廉	〃	（畜産学科家畜管理学）
12. 1	豊田　浄彦	助教授昇任	（農業工学科講師）
12. 31	竹内　　正	死亡	
6. 1. 1	山本　博昭	教授昇任	（農業工学科助教授）
2. 1	岸原　士郎	〃	（農芸化学科助教授）
	堀尾　尚志	〃	（農業工学科助教授）
4. 1	岩崎　照雄	農学部長	（併任）
	尾崎　叡司	停年	（農業工学科教授）
	西川　欣一	〃	（園芸農学科　〃　）
	東　　順三	〃	（農芸化学科　〃　）
	山口　　禎	〃	（園芸農学科　〃　）
	田村　憲志	筑波大学講師出向	（農芸化学科助手）
	加古　敏之	教授昇任	（園芸農学科助教授）
	安田　武司	〃	（園芸農学科助教授）
	石田　陽博	〃	（農業工学科助教授）
	万年　英之	助手採用	（畜産学科家畜育種学）
	西藤　岳彦	〃	（畜産学科家畜衛生学）
	庄司　浩一	〃	（農業工学科圃場機械学）
	白井　康仁	〃	（自然科学研究科（生物化学））
5. 1	宮野　　隆	助教授昇任	（畜産学科助手）
	中屋敷　均	助手配置換	（農学部へ）
	藤嶽　暢英	〃	（　〃　）
	前川　　進	農場長	（併任）
6. 1	三十尾修司	助教授昇任	（園芸農学科講師）
7. 1	保坂　和良	〃	（付属農場）
	多田　明夫	助手採用	（自然科学研究科（水利用工学））
10. 1	幡山　文一	教授配置換	（医療短期大学部より）
	大野　　隆	助教授配置換	（　〃　）
10. 16	内田　一徳	助教授	（京都大学農学部より）

六篠会平成４年度一般会計決算報告書

収支対照表

前年度繰越金	1,474,914	本年度支出金	5,384,825
本年度入金	5,213,124	次年度へ繰越	1,303,213
合計	6,688,038	合計	6,688,038

収入の部

項目	予算額	決算額
前年度繰越金	1,474,914	1,474,914
入会金	4,800,000	5,130,000
預金利子	80,000	67,389
雑収入	30,000	15,735
合計	6,384,914	6,688,038

支出の部

項目	予算額	決算額
農学部・農場活動援助費	550,000	550,000
一般事業費	2,530,000	1,940,450
一般事務費	700,000	686,905
会議費	200,000	178,653
旅費	50,000	35,380
慶弔費	200,000	207,437
神大学友会経費	150,000	36,000
農場長会議援助費	200,000	200,000
農水系学部長協議会援助費	50,000	50,000
学術振興基金へ繰り入れ	1,500,000	1,500,000
予備費	254,914	0
合計	6,384,914	5,384,825

六篠会平成４年度学術振興基金決算報告書

収支対照表

前年度繰越金	31,814,626	本年度支出金	0
本年度入金	3,154,656	次年度へ繰越	34,969,282
合計	34,969,282	合計	34,969,282

収入の部

項目	予算額	決算額
前年度繰越金	31,814,626	31,814,626
一般会計より繰り入れ	1,500,000	1,500,000
寄付金	1,000	0
預金利子	1,400,000	1,654,656
合計	34,715,626	34,969,282

支出の部

項目	予算額	決算額
学術交流援助費	500,000	0
予備費	500,000	0
保留金	33,715,626	--
合計	34,715,626	0

諸帳簿、関係書類を調査したところ、厳正適確に処理され誤りなきものと認めます。

平成５年４月７日

中谷　吉実㊞
内藤　親彦㊞

六篠会平成５年度一般会計決算報告書

収支対照表

前年度繰越金	1,303,213	本年度支出金	9,810,855
本年度入金	11,448,208	次年度へ繰越	2,940,566
合計	12,751,421	合計	12,751,421

収入の部

項目	予算額	決算額
前年度繰越金	1,303,213	1,303,213
入会金	4,800,000	5,400,000
名簿売上金	3,000,000	1,805,136
学術振興基金より繰り入れ	2,000,000	4,164,767
預金利子	60,000	75,335
雑収入	5,000	2,970
合計	11,168,213	12,751,421

支出の部

項目	予算額	決算額
農学部・農場活動援助費	550,000	550,000
名簿発行費	6,567,000	5,928,805
一般事業費	2,250,000	1,654,041
一般事務費	700,000	766,866
会議費	200,000	173,014
旅費	50,000	23,190
慶弔費	200,000	266,902
神大学友会経費	200,000	88,037
予備費	451,213	360,000
合計	11,168,213	9,810,855

六篠会平成５年度学術振興基金決算報告書

収支対照表

前年度繰越金	34,969,282	本年度支出金	4,164,767
本年度入金	1,301,185	次年度へ繰越	32,105,700
合計	36,270,467	合計	36,270,467

収入の部

項目	予算額	決算額
前年度繰越金	34,969,282	34,969,282
寄付金	1,000	100,000
預金利子	1,500,000	1,201,185
合計	36,470,282	36,270,467

支出の部

項目	予算額	決算額
学術交流援助費	500,000	360,000
一般会計への繰り入れ	2,000,000	4,164,767
予備費	500,000	−360,000
保留金	33,470,282	0
合計	36,470,282	4,164,767

平成五年度関係諸帳簿を監査した所、いづれも適正に処理され誤りなきものと認めます。

平成６年４月18日

監事　中谷　吉実㊞
　　　内藤　親彦㊞